

日本における令和7年度の人権啓発重点目標

『誰か』のこと じゃない。



～人の世に熱あれ、人間に光あれ～

日本では、昔から「被差別部落（ひさべつぶらく）」とよばれる地域に生まれたというだけで、学校に通えなかったり、仕事を断られたり、結婚さえも反対されたりする人たちがいました。このような差別は、江戸時代の身分制度の影響が明治時代になっても残っていたもので、その人の中身や努力とは関係なく、「生まれ」によって人を見下す考え方が広く社会にありました。

そんな中で、「もうこんな差別はいやだ」「人間としてあたりまえの生活を送りたい」そう強く願って、立ち上がった人たちがいました。1922年（大正11年）3月3日、京都で「全国水平社（ぜんこくすいへいしゃ）」がつけられました。この日、日本で初めて、差別をなくすための本格的な人権運動が始まったのです。そこで発表された言葉——「人の世に熱あれ、人間に光あれ」——差別のない社会をめざす、力強いこの言葉には、「すべての人が大切にされる社会をつくりたい」という、強い願いが込められています。

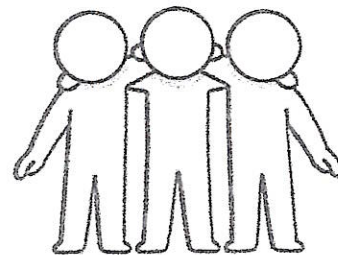
全国水平社の運動は、日本の人権の考え方に大きな影響を与えました。しかし、差別が完全になくなったわけではありません。

今でも、SNSでの心ない書き込みや、友達を見た目や家庭の事情でからかうことや「ふつうはこうだよ」と決めつけて、ちがう考えの人を無視したり、仲間はすれにしたりすることはありませんか？

もしかすると、私たちのまわりにも、「小さな差別」や「見えにくい人権侵害」があるかもしれません。だからこそ今、「ちがいを認め合うこと」「人として大切にされること」の意味を、もう一度考えてみましょう。

こうした差別をなくしていくために、大切なのは次のことです。

- うわさや出身で人を判断しない
- 相手の気持ちを想像する
- 差別やいじめに気づいたら、自分ごととして考える



——「人の世に熱あれ、人間に光あれ」——

この言葉を100年以上前に語った人たちは、今の私たちに、

「そのままでいいんだよ。あなたには大切な価値があるんだよ」と伝えているように思えます。

これからも、自分自身の人権を守るとともに、周りの人の人権も大切にできる、やさしい心を育てていきましょう。

みなさん一人ひとりの考えと行動が、これからの社会をつくっていきます。どうか、「自分には関係ない」と思わず、身近なところから人権について考えてみてください。